

源氏  
浮世

五十四帖上





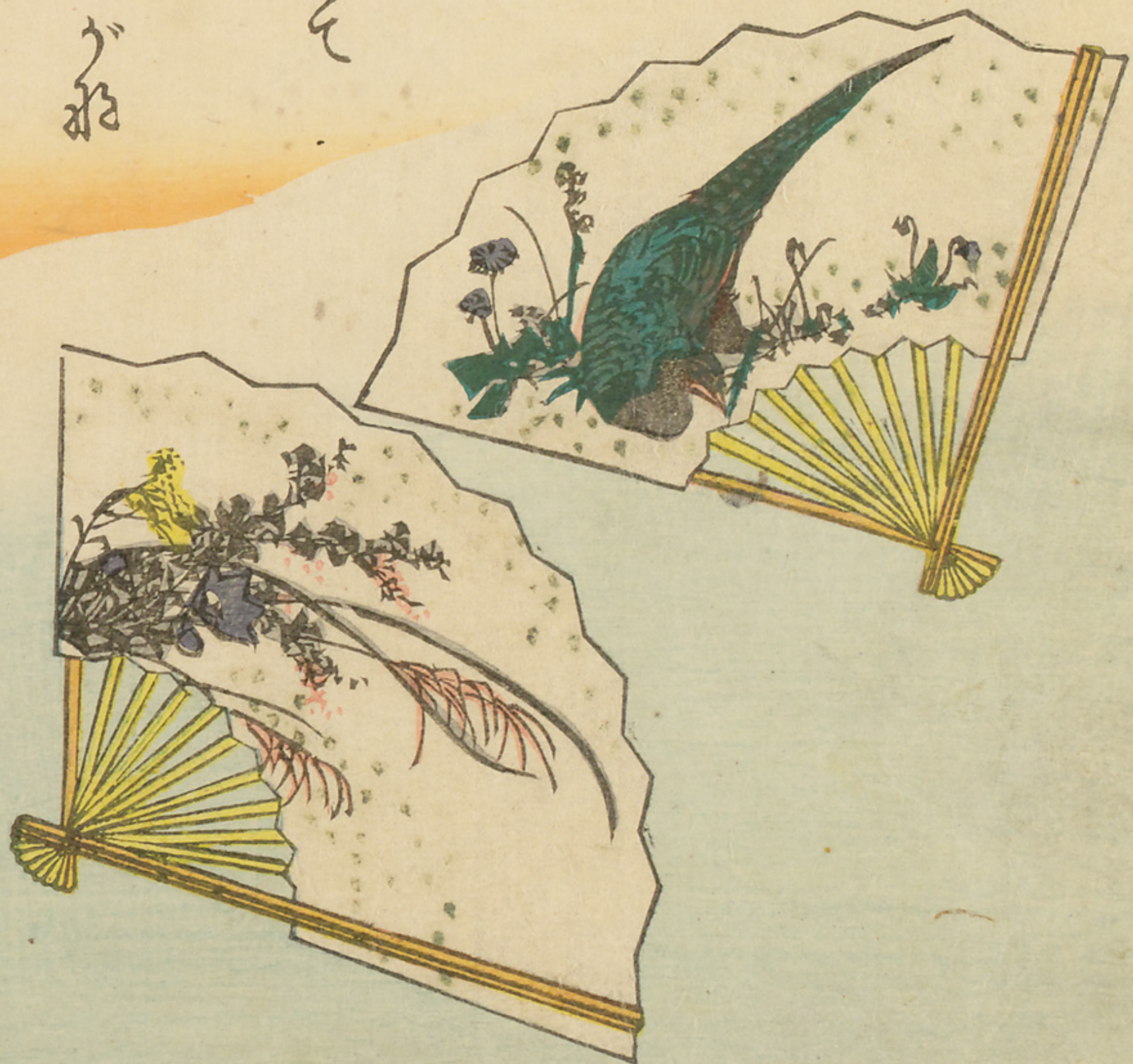
浮世源氏

五十帖  
上の巻

あまのこゝろを  
あまのこゝろを  
あまのこゝろを  
あまのこゝろを

あまのこゝろを  
あまのこゝろを

魚市  
女お菫あや



源氏物語の世式記の名文ありて古今  
是れ也とて代書はつづぬるものもほし敷に  
こき世道の先達其解が事々に註解を加へ  
るの河海明字孟洋紙江辨の美水湖月  
の註まりの十帖を源氏姫の轉  
忍草源氏提要管鏡小鏡並竹新橋雅  
福よ多頼源氏供養佛書にたりては源氏  
文字原の紅白雜語に編みおに六條通ひ。





鶴の羽の厚さよりあり討草双紙の偽書

これまじりの げんく おあひせぶかり 大少堂より行はせは

こりも亦多し 扱形程ある 會わふこの枕の

老月抄を記しおあつてお本國の思男

定女つぎも源氏を題して美の思ふある枕の

何れも生物のそのついで十金帖のちし

夏に書は喜樂堂源氏より成し書の金巻

大部多し申ふ唯この枕は五十四帖をいへ

全巻をそのおとどて此に假しおひたりぬ

軍の此書の序もむごあつて思ふは書に應とく

等とわたり先前集ある相違よりかまかむの二十

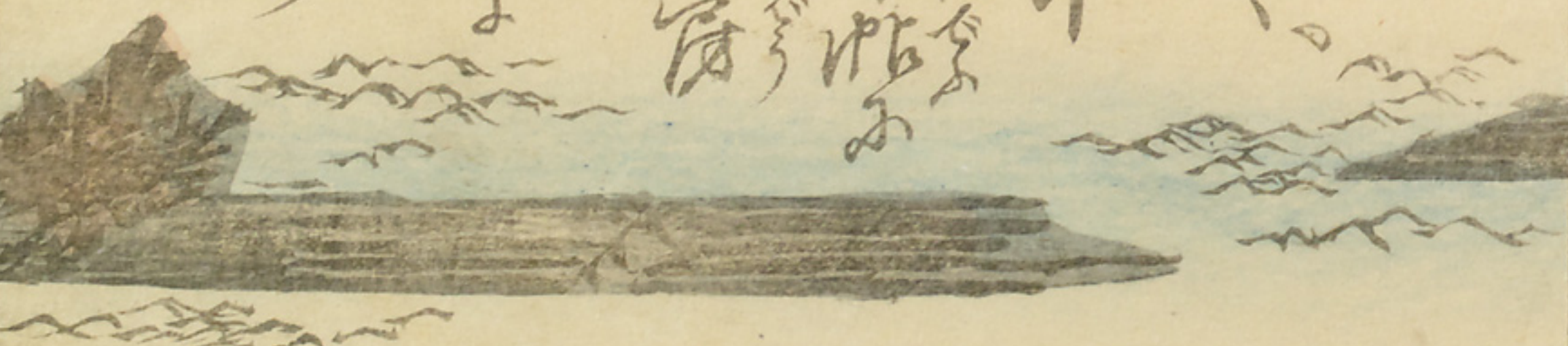
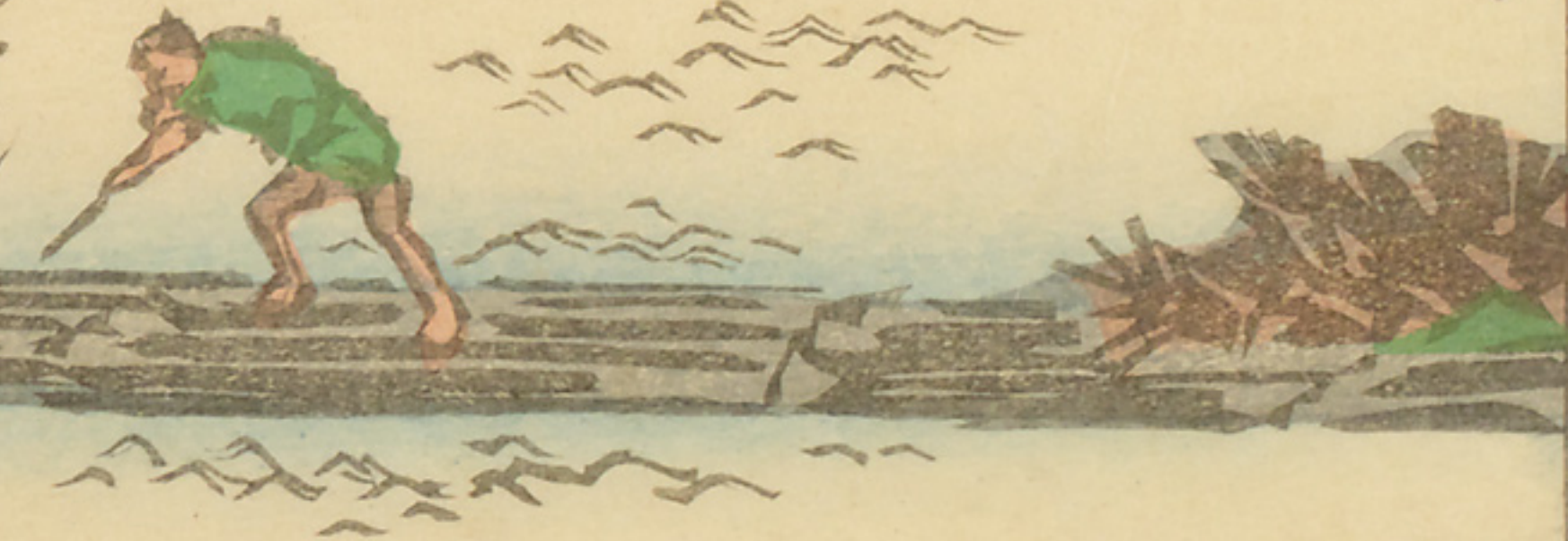
七帖既し此に後集ありし後集の野分より宇治十帖

ひるまを例の笑話の程をいへ漸くして福成と書

に送るははて嚴密にむしむる田舎の書とむしむる若

せぬ書はの板元を知らず新編を林重臣より

板とては類の倍を雪の朝から新町が書巻の







流水亭誌



此の舟の功をたつりてやがて刻成板拵ひ。  
 彫摺舟も他も紙と紙美本紙の事案の  
 くらひやうしうが喜樂堂をよびてもひらぬ  
 会場の本店喜樂安心満庵の  
 古き貴目出をくわらへ  
 うつておき。あらん







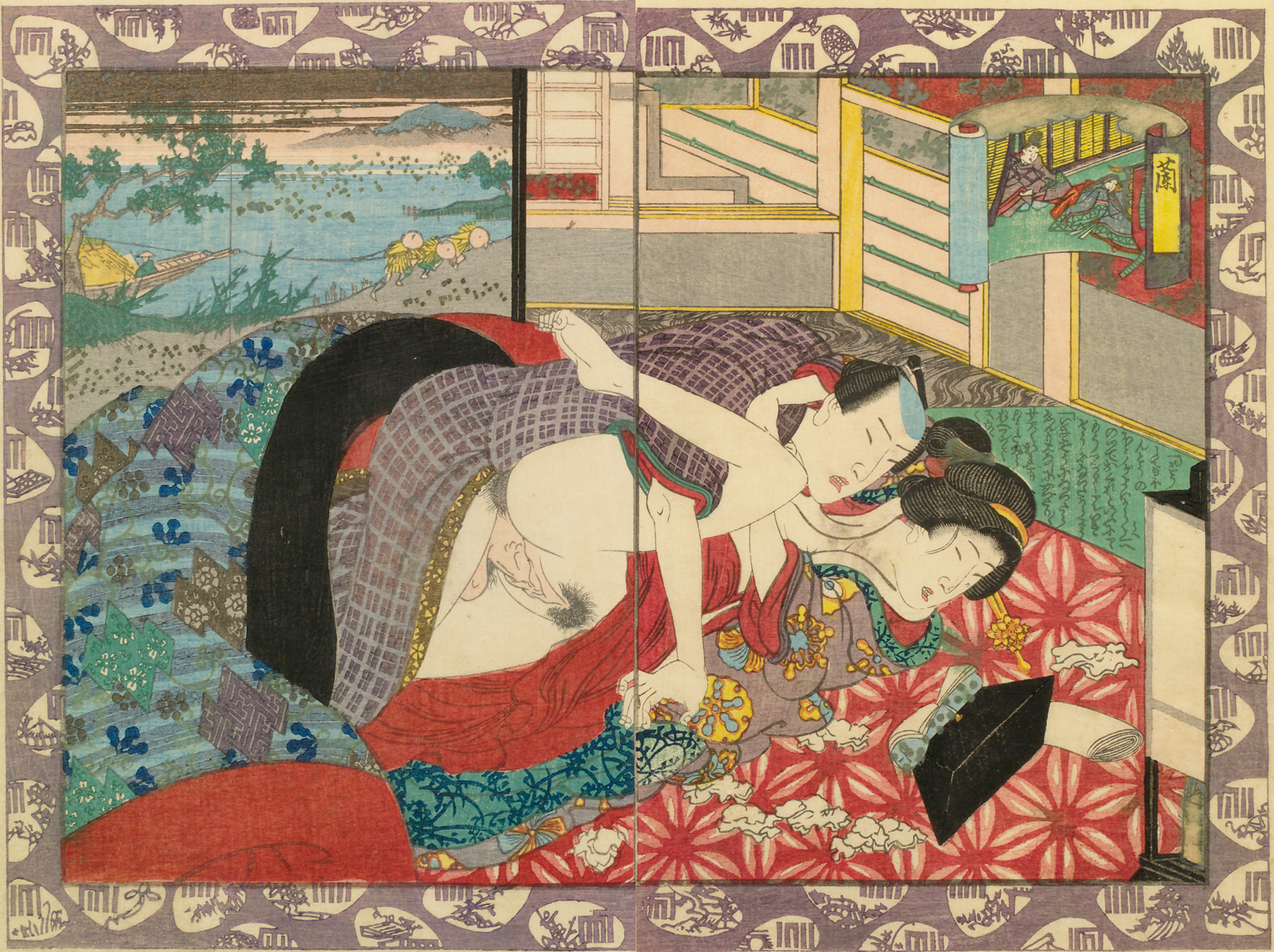


































とむてはてふトあめがりのまはるる小の家園の内の指ふと考るに先  
氏君の二物の大まき太くわううく又あやつとわううくしては  
かうしての大蕃暮者を丸でわううり頼返し由あうぬやうぬとこと  
由まし不様しくしてごうあううらまびび尻尻をりわううトよる拍  
子む方のの気味あさう一室おごろト丹田よせ来るゝ気味あひふトお  
由まわううとぬ収さむづうーさううちう子と男にまうトあうと死  
ふうくスウくふアト森悦注しゆとのふあゝ気味能さの惚さういんすか  
らうておごうくごめくトこのあゝぬあゝぬさうさうり湯のやうおあうてあ  
がまぬ男由女のおり形ふあひさあまうてはさうすは嬰児に  
乳をあゝ一ぬくわううゝ吸付むりやうお男の舌を吸出しぬけむ指に  
あううゝのまごうてお放由やうびむやうお吸付かうみうれひの切  
やうゝぬぬやうあぞうりの股ぐう太のまごぬううぬううぬううぬう

あ男もあ死しおむうりの見まごうりて大腰ふつまごうくまうトま  
官とまし不突込でト多ト知とやのあまひまづひとやすト抜んとす  
まご考ごうつてすうもぬせび見ざりおうれごうまごめつてふあ  
かうして首尾いあまひト思ふに吸付て放ごうあま余念をさむう  
瘡う物込ご女の嬉のあうゝびさうはあひ居茶臼やく淫態はを介  
へのごご入るまごあ抱わう一兎角まう肉一おが中あひうくぬうの色  
ごまうてま股小罫丸をまごみてあもあふへのこののまごあひまうくま  
ご羊ふまああううごまご出かり首ひうれ及うり居茶臼やくハ粒のま  
根とつくと深く入るまご女うううふるまごふ知味能ともあううまひとも  
あんとまうとも能さうてかうごの仕作うくわうりつて腰をうりりらうて突  
たびまうくごああまごあうれつあお氣味能さうもいご色げお島死  
あびのまご淫態あうけ事以思ひく一息一さうみぬ淫あううりる























わろく「らるわひふら」しまおわどねらト入る「しよ」しふ日おとせりよ

後の言葉

ちる日せく後のらるせのらちんひん夜毎く「しり」しんらつてあけらるる時  
「家業せせむひわげふんぐ」今夕のびていむ持て「このわく」の  
すやうど「わん」ふおそらう「しん」ひびよ「己」サをんふ極つとぬがをくみつくれ  
ねららうらぬがひんせうど「ア」サいぬねましくけ入とくぬとわやんよま  
さびばあしてねをん「しん」しん「しん」わらうふとわげやう「男の上」まじり入の  
と極つて「手」おわてび茶臼ふろつと入せよう「抱」背男の口を吸るうす  
うく「ト」とく「腰」とつ入内らぬく「ト」出らる「漢」あ男も「ト」く「持」て  
ふんく「ト」く「ト」ぬらうとまうとて今ふぶひふ火のぶわく「さん」ふあ  
さるがぶがふぬらやうく「ら」やうとむがうく「ト」むびぶ「しん」ら  
ふわりののぬ味よさ快「しん」は「か」ら「け」が「あ」や「ぐ」つ「ん」ふ「ぬ」や「しん」ら  
ちや女に「あり」ら「子」肩ふ「の」字「尻」ぐ「の」字「目」と「ね」ぐ「今」ら「わ」る「ら」

「わ」も「は」ぬ「ふ」せ「ら」し「し」ぬ「か」ら「ぬ」や「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ  
とく「し」ぬ「が」「ぬ」ふ「の」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ  
て「あ」方「う」呼「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ  
男「の」ひ「げ」ぬ「ら」う「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ  
あ「ら」ら「し」ぬ「ら」ぬ「し」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ  
は「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ

言葉上

小松木「ま」の「ま」ひ「ひ」し「し」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ  
ら「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ  
あ「ら」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ  
ふ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ「ぬ」ぬ























源氏

五十四帖  
末







宇喜多 毒人じ

五十四帖

中之巻

此中竹 ちかぢ

ちかぢ

はる ちかぢ ちかぢ ちかぢ

ちかぢ

意 女海峯 市原





















































































源氏  
世

五十四帖

下

































































このうらまきごころを表はしおめてぐひぬらと入れを俵ふ抱付がまごころぬがまの困れ  
申ぬくぬつこころ入るていせそむりていやくそむりていやくそむりていやくそむりていやく  
つる男もやううらまきごころお女いやくてトをりおとさるせして流るごころお女の口  
うら湯のやううらまきごころお女いやくてトをりおとさるせして流るごころお女の口  
ドクわりの流あひらのふるりして田かのもをり勢ひ小子宮の申へトさき込む  
いれ味よさふらりととも考げが種いらくのわく後申のやうに余をるまきと  
幻子ふる一時申は後娘のお腹がわてきんあまは小あいて表向男の方よりり  
ひがま娘の寝も子迷は娘の好と男あう是れふるふるあうトと信交  
も考のり大肌おだ目出交後ととのひて種るく産るみどりあひらの申  
の表娘のこぬり控旅人と竹ふる支拂のこのこま代よろの代表月娘おむら  
すく表富おんく業一はわでさうりけるためーありけり

源兼深氏後下の巻終



